一

坂崎磐音は、わが屋敷の裏手にある宋道院の石段の闇に身を潜めていた。

豊後関前藩の中老の屋敷は大手門を出て南側、城と武家屋敷を結ぶ細い砂州、白鶴の首が胴体の膨らみを見せる辺りの左手にあった。裏は寺町に、さらには小高い浅間山へと通じていた。

磐音にとって、どの辻もどの塀も熟知した場所である。

坂崎家は主の正睦が不正の責を問われて蟄居閉門中の身、表口は竹矢来で封鎖され、裏口からだけかろうじて出入りすることができた。日が落ちるとそこから中間や女中たちがひっそりと買い物などに出ていった。

表口も裏口も国家老の宍戸文六派の家臣たちが警護していた。

ふいに表口で犬の鳴き声が起こり、足音が響いた。

「表口の様子を見に参る！」

裏口を統率する頭分が小者二人を裏口を残して、表へと走り去った。残された二人の小者も六尺棒を手にそちらを眺めていた。

磐音は寺の石段を小走りに駆け下って道を突っ切り、塀の下に積まれた自然石の隙間に片足をかけると塀をひょいと乗り越えた。

豊後関前藩侍屋敷の塀は、下に自然石を積み、さらに藁を混ぜた土で練り上げ、その上に瓦を載せた土塀が多い。

磐音は若い時分に父の目を盗んでは塀を乗り越えて、小林琴平や河出慎之輔らと遊びまわったから、土塀のどこに足掛けがあるかを承知していた。

磐音が飛び降りた所は夏蜜柑の木が何本も繁っていた。

磐音はすでに収獲を終えた夏蜜柑の下を這い進むと樫の大木に接近した。

少年時代、横に張り出した枝に板など張って、小屋にして遊んだ木だ。八尺ばかりのところに張り出した枝に飛びつくと、するすると大木によじ登って身を隠した。

磐音の予測は当たった。

裏口から提灯を灯した警護の役人たちが入り込んで、庭から母屋まで調べまわった。

その騒ぎが四半刻ほど続き、役人たちは磐音の聞き知った声に送られて裏戸から姿を消した。

声の主は老僕佐平だ。

磐音は枝に手をかけてぶら下がり、音も立てずに地表に降り立った。

佐平は、母屋の勝手口に姿を消そうとしていた。

「佐平」

磐音の密やかな声に佐平が訝しげに振り向いた。

「磐音様！」

「しいっ」

喜びの声を上げる老僕を制すると台所の土間に入り込み、戸を締めた。

「お待ちしておりましたぞ！」

佐平はそう言うと老いた両眼を潤ませた。

「苦労をかけるな」

「さっ、旦那様の座敷に」

涙を振り払った佐平が磐音に奥に通るよう指し示した。

両国屋次太夫を連れて庄内湊に辿り着いた磐音と仁助は、仁助の知り合いの漁師舟に次太夫を載せて、臼杵半島を迂回するように関前藩領内に戻って来た。

仁助からの連絡を受けた御直目付の中居半蔵が浜に駆けつけて、次太夫の身柄をいったん釜屋の浜近くの綱元の蔵に移した。さらに夜になって、藩主家菩提寺の大照院の宿坊の一つに移した。

大照院住職の理伯は国家老の宍戸文六をよしとせず、日頃から、

「家臣の分を弁えぬ所業」

と非難していた。

そのこともあって、中居半蔵が理伯師に話をつけて宿坊の一つを借り受けたのだ。そこにはすでに西国屋の番頭の清蔵と手代が囚われていた。

「磐音、ちと急な展開になった」

次太夫の身柄を確保して、すこしは緊張を解いた半蔵が言い出したのだ。

「由布院の出来事がすでに関前に伝わっている。庄内から手代が飛脚を飛ばしたのだ」

「そうでしたか」

「文六様は明日にも城中に正睦様を呼び出して切腹を申し付ける算段。宍戸派は夜を徹して、その準備に追われておるわ」

そういった半蔵は、

「それがしはこやつを徹夜で締め上げる」

足元の板の間に転がされた次太夫に厳しい視線を投げた。

次太夫が恐怖に顔を歪ませた。

「坂崎、今宵が最後の機会だ、仁助の助けを借りて屋敷に忍び入ってこい。正睦様から、なんぞ指示があるやもしれぬでな」

「心得ました」

と磐音はわが屋敷に入り込んだのだった。

磐音が包平を手に廊下を歩いて行くと、奥座敷の一間に明かりが灯っていた。

正睦の部屋であった。

「佐平か、なんぞ出来したか」

懐かしい声が障子の向こうから聞こえてきた。

磐音は廊下に座すと、

「磐音にございます」

と応じた。

正睦はしばらく返事をしなかった。長い沈黙の後、

「入れ」

と入室を許した。

磐音が障子を引き開けると、正睦は書類や帳簿を整理していた。その顔にはすでに死を覚悟した者の潔さが漂っていた。

「ご苦労をおかけ申し、まことに恐縮至極にございます」

磐音は父の前に平伏した。

さらに長い沈黙の後、

「磐音、顔を上げよ」

と正睦が命じた。

磐音が顔を上げると正睦の双眸が潤んでいた。声だけは厳しく、

「豊後関前に暇状を差し出した者が、何用あって戻って参った」

と詰問した。

「父上は、御直目付の中居半蔵が城下にお戻りなされているのをご存じますか」

「いや、知らぬ。閉門の身では何の話も伝わってこぬでな」

正睦の言葉には喜びが漂っていた。

「中居半蔵様は、宍戸派の専断と不正を取り調べるためにお戻りなされたのでございます」

「一歩遅かったな」

正睦の声は再び諦観のにおいを帯びた。

「そなたは目付頭東源之丞に託した手紙を呼んだようじゃな」

ようやく正睦の顔が緊張を解いて和んだ」

「はい。父上がお考えになられた結論をわれらも考えたゆえに、東様の命令で国許に戻って来たのでございます」

正睦が頷いた。

「われらが動くのがちと遅きに失したかもしれぬな」

「父上は明日、城中に上がられるそうでございますな」

「文六様は一気に事を決してしまわれる所存だ。おそらく城中が生きて戻っては来られまい」

正睦は片付けていた書類の山に目を落とした。

「そのようなお気の弱いことでどうなされます」

磐音は父を勇気づけるように言うと、

「父上、江戸の下屋敷にて実高様にお目にかかってございます」

「なんと、そなたは殿にお会いしたか」

正睦の顔が喜びに溢れた。

「はい、参府で江戸入りされたばかりにもかかわりませず、私を密かに下屋敷にお呼び出しになられてございます」

「磐音、そなたは、この父や藩を見捨てたのではなかったのか」

「父上、磐音は苦しみから逃げたのでございます……」

磐音は親友二人を亡くした苦悩の末に関前を離れたことを正直に告げた。

「江戸で暮らす私に、我ら三人の刃傷事件は関前藩に巣食う守旧派の策ではないかとの考えをもたらしてくれたのは、勘定方の上野伊織にございました。伊織はわれらが江戸屋敷で催していた修学会の仲間です。伊織はわれらの帰国を快く思われぬ宍戸文六様が三人を噛み合わせて自滅に追い込んだのではないかと、私の長屋に告げたに来たのです」

「なんと、江戸にもそのような推測を立てた人間がいたか」

「最初、伊織が申すことを信じることが出来ませんなんだ……」

磐音は父に、両替商の今津屋の調べで、豊後関前藩には一万六千五百両の、大阪の両替商天王寺屋五兵衛に八千両、近江屋彦四郎に三千五百両、江戸の藤屋丹右衛門に五千両の、隠された借財があること、その借財の借り主は、江戸家老の篠原三左であること、この借入金をもとに天領の飛騨から切り出された材木を買い受け、江戸に蓄財中に、明和九年の二月に起こった目黒行人坂大火で消失して、投機は一転して借財になったこと、それを調べるためご文庫に入った伊織が宍戸派の手に落ちて、拷問を受けた後に殺されたことなどを告げた。

正睦は呆然として磐音の話を聞いていたが、

「その話を聞かされれば、頷けるところもある」

と洩らした。

「父上、私は伊織の霊に導かれて、探索を始めたのでございます。父上もご存じのとおり、篠原様は病弱の身、とても大金を借りて木材を買い付け、値上がりを待つなどの荒業ができるとは思いませぬ。そこで今津屋どのの紹介にて藤屋の老分番頭に面会しましたところ、借財の際、すべてを仕切ったのは御留守居役の原伊右衛門様ということを聞き出すことができました」

「原どのは文六様と親しき間柄じゃな」

「親しいというよりは文六様の手伝いをなにかとなされて、江戸御留守居役に推挙された人物にございましたな」

「腸なしの伊右衛門どのは、忌憚なく申せばそう言う御仁じゃ」

と答えた正睦は、悲しげな顔をした。

腸なしとは原の異名だ。

藩主を差し置き、国家老が豊後関前藩の藩政運営を長年牛耳ってきたのだ。

正睦はそれを看過してきた罪に身を震わせていた。

「そのような折り、篠原様の補佐と称して、宍戸有朝様が江戸藩邸次席家老として赴任なされ、一挙に宍戸派が強化されました」

「江戸屋敷も文六様の息がかかった者によって占められたか」

「有朝様の歓迎の宴を見張っていて、その顔ぶれに仰天いたしました。二十三名に及ぶ出席者の中に中居半蔵様がおられたのです」

「半蔵どのは職務であろう」

正睦は即座に言い切った。

「はい」

「磐音、そなたが申した不正借り入れの一万六千五百両のしかとした証拠、なんぞあるか」

「今津屋の老分番頭どのが私への餞別代わりにと、藤屋丹右衛門方で借りられた五千両の借用書の写しと添え書きを渡してくれましたゆえ、持参しました」

「それはなによりのもの」

正睦の顔がわずかに和んだ。

「明日の城中では父上の承知のことを堂々と申し述べてくだされませ。私はその場に同席はできませぬが、御直目付の中居半蔵様は列座なされます。むろん私が持参した証拠の品は半蔵様がお城に持参なされます」

「それは心強きお味方じゃな」

「父上、気を鎮められてお聞きください。白石孝盛様が暗殺されてございます」

「な、なんと……」

孝盛は正睦の碁敵であり、幼き頃からの友であった。

磐音は父の顔に落ち着きが戻るまで待って言った。

「すでに刻限も刻限ゆえ、本日はこれにてお暇いたします」

「行くか」

「はい」

磐音が正睦に一礼して廊下に出ると、廊下の端に二人の女が座していた。

「母上、お久しゅうございます」

「磐音、よう戻ってこられました」

照埜は肩を震わせて泣いた。

磐音は努めて明るく妹に言った。

「伊代も壮健そうでなによりじゃな。屋敷がこのような時期に外に出ておる兄を許してくれ」

「兄上、父上を助けられる爲に戻ってこられたのですね」

「父上がなんの不正もなされておらぬこと、家族たるわれらが一番承知していることだ。兄は命を擲っても、父上の疑惑を晴らす」

「よう言うてくださいました」

「伊代、話したきことは山ほどある。が、今は明日の父上のお呼び出しを切り抜けることが第一。父上と母上を頼んだぞ」

「兄上、約束してください。ことが一段落した暁には、屋敷に戻ってくると」

「伊代、そのこともこの次に会ったときに話そう」

磐音は懐に用意していた二十五両を伊代に差し出した。

「この金子は奈緒どののために用意してきたものだ。奈緒どのはすでに関前を離れられたとのこと、もはや役には立たぬ金だ。そなたが預かっておいてくれ」

「兄上、奈緒様は……」

「今は申すな。父上の身から一つひとつ解決していくときだ。仲間の方々も待っておられる、よいな」

「お約束しました」

母上、堅固でという言葉を残して、磐音は奥座敷から台所に戻った。

「磐音様、屋敷の外の動きが怪しゅうございます。気をつけてください」

佐平の言葉に磐音は頷くと、台所の戸口から庭に走り出た。

土塀から顔を出して通りを見た。

裏口に立つ警護の役人たちからおよそ十数間離れていた。

磐音は役人たちの動きを注視しながら土塀を乗り越え、宋道院の石段に駆け込んだ。暗がりを利して山門に上がり、境内を大きく迂回して、大手門近くの武家屋敷の鍵曲がりに出た。

鍵曲がりは、敵方が押し寄せてきたときに、鍵の手型に曲がった屋敷の土塀を利用して城への進入を防ぎ止める役目を持っていた。

土塀の下には半間ほどの石組みの疎水が流れて、鯉などが飼われていた。

磐音はふいに足を止めた。

三人の男が姿を見せた。

「坂崎磐音、暇乞いした人間が何用あって関前に戻ってきた」

声に聞き覚えがあった。

国家老宍戸文六家の家来、福富美田だ。

美田は陪臣ながら剣の遣い手といわれ、関前城下で中戸信継道場と競い合ってきた勢源派一刀流岩間親房道場で免許皆伝を得た剣士だった。

年の頃は四十前後か。

その美田の連れは、浪々の剣術家といった風情の男二人だ。

「そなたが家に戻るは分かっておった。そなたの父親は、蟄居閉門の身で明日に沙汰が下る身。その前夜の怪しげな行動かな、斬る」

美田の命に二人の剣術家が剣を抜き放った。

美田もゆっくり抜いた。

「そなたの子供騙しの居眠り剣法とやら、見たこともないが、われらがいかさまを打ち破ってくれよう」

美田が言うとぱっと草履を後方に跳ね飛ばした。

磐音は簡単に逃げ切れるものではないと覚悟した。また時間が経てば、宍戸派が駆けつけることも考えられた。

一気に戦いに決着をつけること、さらに坂崎親子が会ったと知られないことが肝要だった。ならば、美田らを倒すしか選択の余地はなかった。

磐音は包平を抜きながら、受けの剣を捨てよと己に命じた。

「美田どの、そなたのお命、申し受ける」

磐音はそう宣告すると、包平を中段に置いた。

美田の前に二人の剣術家が出てきた。

磐音の右手の男は、蟹のような押し潰された体の前に剣を高々に立てた。

今一人の長身は、脇構えに置いた。

美田は一歩下がったところで正眼に構えた。

「参る！」

見廻り組の提灯か、武家屋敷の向こうの夜空にちらちらした。

磐音は、包平の切っ先を上下に揺らして相手を誘い込んだ。

「おおうっ！」

長身の剣術家が叫んで突進の構えを見せた。が、疾風と変じて襲いかかってきたのは、背の低いほうだ。

磐音は咄嗟に応じていた。

中段の剣先を水平に寝かせると突進し、高々と立てていた剣の、鉈でも振り下ろすような重い刃風を掻い潜って、剣術家の喉を襲った。

伸びのよい磐音の二段突きが相手の喉を破り、血を振り舞た。

後の先ながら、迅速の奇襲が一瞬のうちに二人を倒していた。

長身の剣術家は疎水に体を転がり落として水音を立てた。

もはや時間の猶予はない。

「こなくそっ！」

美田が叫んだときには、磐音は元の場所に戻り、正眼に包平を構えていた。

「勢源一刀流、拝見つかまつる」

磐音の言葉に誘われた美田がつつつっと間合いを詰めると、正眼の剣をゆっくりと逆八双に移行させていった。

両者は同時に仕掛けた。

一気に間合いに踏み込むと磐音は正眼の包平を美田の喉元に、美田は磐音の右肩に伸ばした。

が、この一年、修羅場を潜り抜けて生きてきた磐音の包平が伸びを示して美田の喉を切り裂いていた。

どさり

と横倒しに倒れ込む美田を振り向きもせずに、武家屋敷の暗がりに駆け込んだ。

その直後、見廻組の明かりが鍵曲の戦いの場に到着して、騒ぎ声を上げた。